

日本初!
ご自宅のパソコンから席を選んで
チケットがcaえる!!
<http://www.japanphil.or.jp/>

日本フィル コンサートガイド かえる新聞

Vol.35 2005年12月1日
発行: 日本フィル・サービスセンター
〒166-0011 東京都杉並区梅里1-6-1
TEL:03-5378-5911 FAX:03-5378-6161

命を紡ぐ鍵盤詩人・館野 泉& ロシアの巨匠アレクサンドル・ラザレフが贈る プロコフィエフ!プロコフィエフ!!プロコフィエフ!!!

アレクサンドル・ラザレフ&館野泉という今最も注目される二人の音楽家を迎え、日本フィルが自信を持って放つオール・プロコフィエフ・プログラム!

タクトを握るラザレフは、スケールの大きな音楽で世界を魅了し続ける現代ロシアの巨匠。1987年から95年にかけてボリショイ歌劇場首席指揮者と芸術監督を務めましたが、両方のタイトルを一人の指揮者が兼任したのは30年ぶりのことだったそうです。西欧での活躍も目覚ましく主要オーケストラに次々と客演、自国の豊かな大地が生み出した壮大なオーケストラ・サウンドを精力的に紹介し続けています。日本フィルには2003年3月に登場。第185回横浜定期演奏会ではチャイコフスキー:ピアノ協奏曲第1番(ピアノ/有森博)と交響曲第5番、第548回東京定期演奏会ではラフマニノフ:ピアノ協奏曲第1番(ピアノ/小川典子)、ショスタコーヴィチ:交響曲第11番《1905年》というロシアン・プログラムをとり上げ、そのスケールの大きな音楽で会場を興奮と熱狂の渦に巻き込みました。今も楽壇の話題に上るその快演を再び、との多くのお客様の声にお応えしてのラザレフ再来です!ロシアが生んだ大作曲家プロコフィエフの膨大な作品群の中から選び抜かれた3作品で日本フィルから溢れんばかりバイタリティーを引き出し、その真髄を描き出してくれることでしょう。



第576回東京定期演奏会 《プロコフィエフという時代》

12月1日(木)、2日(金) 午後7時開演 サントリーホール

指揮:アレクサンドル・ラザレフ ピアノ:館野 泉

プロコフィエフ/交響組曲《3つのオレンジへの恋》

ピアノ協奏曲第4番(左手のための)

交響曲第5番

第69回マエストロ・サロン 《アレクサンドル・ラザレフの巻》

11月29日(火) 午後7時~(1時間半程度)

会場:東京国際フォーラム(有楽町)


参加費:1,000円(茶菓子付き)

東京定期演奏会に出演する指揮者自らが演奏会の聴きどころや楽しみ方を語る日本フィルのマエストロ・サロン。東京定期会員、もしくは第576回東京定期演奏会の一回券をご購入のお客様がご参加頂けます。お申込みはサービスセンターへ。


「左手の作品と両手の作品、その境をなくしていきたい」 館野泉さんスペシャルインタビュー

常に世界の第一線で活躍を続けてきた館野泉さんが、フィンランドでのリサイタルで脳溢血を起こして倒れたというニュースに大変な衝撃が走ったのは、2002年1月のことでした。それから3年…。館野さんは昨年のリサイタル復帰、CD録音に続いて今年5月、日本フィルとの共演で素晴らしい協奏曲復帰を果たしました。さらに9月、日本フィル北海道定期札幌公演に同じラヴェルの協奏曲(左手のための)で出演。札幌 Kitara 大ホール満場の聴衆の熱狂的支持を受け、その不屈の演奏は「驚異の左手」「揺るぎないピアノイズム」と絶賛の嵐でした。12月の定期演奏会では、自身初めてというプロコフィエフ:ピアノ協奏曲第4番(左手のための)に挑みます。この隠れた名曲の魅力を、かえるくんが直撃インタビュー!




 今年は5月、9月のラヴェルに続き12月のプロコフィエフと、ご一緒できる機会が多くとても嬉しいです。

館野さん:お陰様で前のように色々なことができるようになりました。左手の室内楽作品はあまり無いと思っていたのですが思いのほかあって今年1月に演奏しましたし、コンチェルトについても日本フィルさんとの共演でカムバックしました。体の具合を見ながらになりますが、とてもやりがいがあります。当然のことですが、街に出るとか旅行で動くなどといった日常生活は以前のようにはいかず大変です。また一日の練習時間も以前のように6時間、7時間とはならず、3時間くらいが限界です。しかしそのような制限はありますが、とにかく弾けるようになったということが嬉しくて仕方ないんです。とても幸せに感じています。


 大勢のファンの方も協奏曲復帰を心待ちにされていました。

館野さん:先日の日本フィルとの札幌公演もそうでしたが、各地で聴衆の方が待っていて下さり、本当に真摯に聴いて下さるというのは、音楽家冥利に尽きるところだと思います。

日本フィルとは若い頃からとても縁があるんです。沢山のことをやらせて頂いたし、色々とお声も掛けて頂いて。

 初めて日本フィルの定期演奏会にご出演頂いたのが1965年、今からちょうど40年前ですね。

館野さん:ええ。ブラームスのコンチェルトだったのではないのでしょうか(第107回定期、ブラームス/ピアノ協奏曲第1番、指揮:渡邊暁雄)。病氣から復帰する時にも、長年つながりのある日本フィルから真っ先に声を掛けて頂き、とても嬉しく思いました。そして今度はプロコフィエフの共演。とても楽しみです。

 プロコフィエフの左手のための協奏曲というのは、初めて聴かれるお客様が多いのではないのでしょうか。

館野さん:プロコフィエフの協奏曲は、3番や2番は演奏される機会がありますが4番は滅多に演奏されませんね。この作品は(第一次大戦で右手を失った大ピアニスト)P.ヴィトゲンシュタインからの委嘱で書かれました。とても健康でのびのびとして、そして詩的な叙情性を備えた素敵な音楽です。プロコフィエフの初期の作品のような、一面では激しい思いを込めた叙情性とは違って、だんだんと自分の内面に落ち着いてきた、成熟した気持ちを通して出てきた叙情性だと思います。非常にロマンティックな部分と激しいモダンイズムとのバランスが取れ、すごく素直に自然に聴ける、いい音楽ですね。



「難しい音楽」というイメージをお持ちの方がいらっしゃるかもしれません。

館野さん：ほとんど演奏されないの、取っ付きにくい、耳に馴染んでいないという印象があるからかもしれません。作曲当時はなかなか理解されず、ヴィトゲンシュタインでさえもプロコフィエフに「私はこの作品を一音も理解することができない。だから弾きません」と手紙で伝えたと言います。それは当時の耳で聴くと、音の使い方や調性の動かし方が目まぐるしく変化し、奇怪というかとらえようの無い音楽と思われたからではないでしょうか。委嘱作だったこともあって、プロコフィエフは生涯この作品が演奏されるのを聴くことはありませんでした。皆さんもご存知のように、現代では傑作と言われる作品が、作曲当時はなかなか認められなかったことは珍しくないですね。ヴィトゲンシュタインの時代から半世紀以上が経ちましたが、今の私たちの耳で聴くと、このプロコフィエフの作品も決して難解なものではありません。確かに一回聴くと、すごいスピードで目の前をあっという間に通り過ぎていくような印象があります。私自身、初めて聴いた時にはあっけにとられてしまいました。しかし決して何でもいい音を使って流しているのではない。一つ一つの音が重要で、すごくいい音の組み合わせなんです。大変なスピードで駆け抜けながら聴く人の気持ちに引っ掛かる、心に残る音楽なんです。音楽というのはそもそも「わかる」「わからなきゃいけない」というものではないのかもしれない。何か耳に残る、心に残るものがある、そういう感覚がいいのではないのでしょうか。



今回のプロコフィエフ・プログラムは指揮のラザレフさんからのご提案でした。館野さんからもプロコフィエフのお話を頂いていたので、絶妙のマッチングになりました。

館野さん：プロコフィエフの4番を取り上げて下さったというのは、非常に思い切った大胆な企画で素晴らしいと思います。私としてはとても嬉しいことです。来年はフィンランドのオーケストラでこの作品を取り上げたいということになりました。このように、演奏の機会ができると他のオーケストラも興味を持ち、段々と広がっていくものです。左手のコンチェルトにはとてもいい曲が多いんですが、「左手で弾く」というだけで遠ざけてしまうような面がありますね。左手で弾くといっても、例えばこのプロコフィエフ作品が鍵盤の全域を存分に使って演奏するように、両手で弾くのと全く変わりません。確かに作曲のきっかけは「右手が使えなくなったピアニストのために」ということが多いでしょうけれど、できた作品はみんな同じ素晴らしさを持っている。両手を使える人は「左手でも弾ける」作品を演奏できるわけですから(笑)、もっと取り上げられてもいいと思います。私は、そういう境をとっばらっていきたいと思っています。



多くのお客様にとっては、新たな作品との素敵な出会いになりますね。12月の共演が本当に楽しみです。

館野さん：CDなどもいいですが、やっぱり生の演奏がいいですね。生の演奏だから、もしかしたらハプニングだってあるかもしれない。その時一度しかないというスリルもあるし、一回きりの、この場から聴けるというよさがあります。私もとても楽しみにしています。

今年の《第9》はバッハの名曲とともに・・・

コバケン&沼尻竜典、歓喜の「第9」特別演奏会



【小林研一郎〔音楽監督〕歓喜の「第9」特別演奏会】

12月17日(土) 午後6時&21日(水) 午後7時
横浜みなとみらいホール

12月18日(日) 午後2時 サントリーホール

12月22日(木) 午後7時&25日(日) 午後2時 東京芸術劇場

パイプオルガン：井上圭子

独唱：菅英三子、秋葉京子、錦織 健、青戸 知

合唱：東京音楽大学〔17 & 21日〕、武蔵野合唱団〔18日〕

東京藝術大学声楽科学生(有志)〔22 & 25日〕

J.S. バッハ：《目覚めよ、と呼ぶ声あり》

トッカータとフーガ 二短調 (以上オルガン独奏)

【沼尻竜典〔正指揮者〕歓喜の「第9」特別演奏会】

12月27日(火) 午後7時 東京芸術劇場

12月28日(水) 午後7時 サントリーホール

オーボエ：広田智之、ヴァイオリン：木野雅之〔ソロ・コンサートマスター〕

独唱：大岩千穂、重松みか、錦織 健、泉 良平

合唱：日本フィルハーモニー協会合唱団

J.S. バッハ：オーボエとヴァイオリンのための協奏曲

※ 18日、25日の公演は売り切れました。そのほか残席僅少の公演もございますので、詳細はサービスセンターにお問合せ下さい。

偉大なる作曲家ベートーヴェンが人類の平和と愛を願って作曲した渾身の傑作、交響曲第9番《合唱》。いよいよ各地でこの「歓喜の歌」が響き合う季節がやってきました。今年には音楽監督・小林研一郎、正指揮者・沼尻竜典という日本フィルの顔である2人のタクトで、心落ち着くバッハの名曲とともに贈り致します。

小林研一郎はその著書の中で、十歳の時の「第9」との出会いを次のように語っています。「遠くおぼろげな記憶の中で、しかし、この時の鳥肌の立つような感動は、昨日のように今も鮮やかによみがえってくる。その時僕は、子供心ながらに決心した。無からこんな偉大なものを作ることができる世界こそ、自分が生涯を賭ける値打ちのあるものだ」(『指揮者のひとりごと』騎虎書房)この鮮烈な体験が原点となり音楽家への道を歩み始めた小林研一郎にとって、「第9」は今も唯一無二の特別な作品です。その確固たるスタイルと情熱で、今年もホール中を興奮へと導いてくれることでしょう。

沼尻竜典指揮の公演では、前半にバッハの凛とした名作協奏曲をお贈り致します。この作品は、バッハが残した最も円熟した協奏曲の1つ、「2台のチェンバロのための協奏曲ハ短調」の原曲と言われています。バッハの原譜が残されておらず、いくつかの復元版によって世に蘇りました。今回はM.シュナイダーによる二短調版でお贈りします。昨年8月まで日本フィルのソロ・オーボエを務めた広田智之、ソロ・コンサートマスター木野雅之の透明で豊かな音色により、奥深いバッハの世界をご堪能下さい。

コバケンのニューイヤー・コンサート～日本フィル創立50周年の幕開け

第214回横浜定期演奏会
2006年1月7日(土) 午後6時
横浜みなとみらいホール

指揮 / 小林研一郎

ヴァイオリン / 木嶋真優

ドヴォルジャーク：交響曲第8番《自然交響曲》

ブルッフ：スコットランド幻想曲

ラヴェル：ボレロ

ドヴォルジャークの自然賛歌とも言える名作交響曲、日本フィル得意の《ボレロ》で、記念すべき2006年の幕開けを華やかに飾ります。木嶋は18歳という若さでありながらその演奏の完成度が国内外で大絶賛され、今最も注目を集める若手ヴァイオリニスト。ワールドクラスの演奏をどうぞお楽しみに！

第156回サンデーコンサート
1月8日(日) 午後2時30分
東京芸術劇場

指揮 / 小林研一郎 ピアノ / 仲道郁代

ドヴォルジャーク：交響曲第8番《自然交響曲》

モーツァルト：ピアノ協奏曲第20番

ラヴェル：ボレロ

モーツァルト生誕250周年を迎える2006年の幕開けを祝います。ピアノ協奏曲第20番は、それまでのモーツァルトの協奏曲とは一線を画すほどの高みに達した傑作。人氣、実力ともに日本を代表するピアニスト仲道郁代が、作品のもつ美しい叙情性を鮮やかに描き出してくれることでしょう。

第304回名曲コンサート
1月15日(日) 午後2時
サントリーホール

指揮 / 小林研一郎

パイプオルガン / 井上圭子

ドヴォルジャーク：交響曲第9番《新世界より》

サン＝サーンス：交響曲第3番

《オルガン・シンフォニー》

コバケン&日本フィルの十八番中の十八番である名作交響曲2曲をお贈り致します。《新世界より》ではドヴォルジャークならではの名旋律の数々を、サン＝サーンスの作品ではホール全体を轟かす荘厳なパイプオルガンとオーケストラの競演をお楽しみ下さい。

イラスト / 小澤一雄

